

2024年度 薬学部 薬学科

「学修行動と学修成果の調査」の解析

薬学部では全学科共通の項目に加え、薬学部の卒業認定・学位授与の方針（DP：ディプロマ・ポリシー）と教育課程編成・実施の方針（CP：カリキュラム・ポリシー）に沿った項目を加えて調査を実施した。

1. 授業の予習や復習について

「授業の予習や復習」について「頻繁にした」または「かなりした」と回答した学生は、6年生では7割程度と高かったが、他の学年はいずれも3割程度であった。2023年度は5年生が最も低く2割程度であったが、2024年度は3割程度まで上昇し改善した。これは授業内容を薬剤師国家試験既出問題を使った演習形式に変更したことによるものと思われ、一定の成果が得られたと考えられた。しかしながら1～5年生では「時々勉強した」と回答した学生が5割程度、「あまりしなかった」または「全くしなかった」と回答した学生が2割程度おり、自己学習の定着について依然として課題を抱えている。多くの科目が国家資格に関わることを踏まえると、入学後早期に能動的な学習の必要性を学生に認識させ、自己学習を促す必要がある。

2. 授業時間以外の学修時間について

「授業時間以外の学修時間（1日あたり）」については、6年生では「2時間以上」と回答した学生が9割以上を占めたが、1～5年生は「2時間未満」と回答した学生が6割程度を占めた。6年生は他学年と比べて大幅に学修時間が長く、薬剤師国家試験に向けて、一日の多くを学修に費やしていることがうかがえた。低学年で履修した科目の知識が定着していない場合、高学年になってから遡って学修するための追加の時間を確保する必要がある。低学年で授業内での学修に加えて、授業外時間を有効に活用して知識の定着を図ることが大切である。

3. 本学の教育内容や設備、学修支援について

「本学の教育内容や設備、学修支援」のいずれの項目についても、「とても満足」、「かなり満足」または「やや満足」と回答した学生が8割程度と高く、満足度はそれなりに高いと考えられた。

2024年度から薬学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版が開始され、本学部ではそれに基づく新カリキュラムが1年生で実施された。「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」について、「とても満足」または「かなり満足」と回答した学生が6割程度おり、2023年度の1年生と比べると1割程度の上昇がみられた。新カリキュラムの改訂が学生の満足度を高めることにつながったと考察される。1年生のこの割合は他のどの学年よりも1～2割程度高く今後の推移を期待したい。一方、「授業の内容」については、6年生で「やや不満」または「とても不満」と回答した学生が2割程度おり、どの学年よりも高かった。学年が上がるにつれ学生間の学力差が開き、個々の学生に適した授業内容がそれぞれ異なることによるものと思われる。薬剤師国家試験を控える学年であることから、学

力層ごとの追加補習などの実施などが考えられる。

「講義教室の設備（空調や照明を含む）」については、「やや不満」または「とても不満」と回答した学生が3割程度おり、大学全体の2割に比べて高い傾向にあった。なお「演習室や実習室の設備や器具」については大学全体のものと同程度であった。特にその傾向が、共用試験を控えた4年生と薬剤師国家試験を控えた6年生でみられたことから、大教室における講義環境については授業により集中できるように改善余地があると考えられる。

「学生食堂」については、「やや不満」または「とても不満」と回答した学生が2割程度おり、2023年度と比較し1割程度低下した。コロナ禍における利用規制等が解除されてきたことによるものと思われるが、「メディアライブラリー（図書室）」、「保健室や付属の医療施設」といった他の施設に比べて1割程度高い状態にあり、改善の優先順位は高い方にあると思われる。

5. 学修成果について現時点でどのくらい身についていますか（薬学部独自項目）

薬学部のDPを念頭においた項目である。

「責任感と高い倫理観が身についている」、「他者との討議を通じて意見をまとめることができる」、「医療や健康に関わる問題に気づくことができる」については、どの学年も「十分に身についている」または「かなり身についている」と回答した学生が5割程度おり、おおむね達成されていると考えられる。学年別にみると、1・2年生、5・6年生が高い傾向にあり、3・4年生で低い傾向にあった。学修が進むにつれてそれぞれ求められている水準に対する理解が進んだ結果、自分の理解度をより客観視するようになってくることを反映しているのではないかと考えられる。

「専門的な知識や技術を活かして問題を解決する手段を提案できる」、「健康上の課題を抱えた人を評価し適切な解決策を提案できる」、「処方箋に基づいて調剤ができる」、「エビデンスに基づいた医薬品情報を収集できる」、「患者にとって必要な服薬指導を実践できる」、「地域の人々の健康支援を実践できる」、「セルフメディケーションを支援できる」については、「十分に身についている」または「かなり身についている」と回答した学生の割合が学年が上がるにつれ上昇しており、6年生では5～6割程度に達していた。DPに沿った学修が達成できているものと考えられた。

「英語で書かれた資料を勉強や研究に活用できる」については、「十分に身についている」または「かなり身についている」と回答した学生の割合が学年が上がってもそれほど上昇しておらず6年生でも2割程度であった。英語そのものの学修の必要性についての異論はないが、近年の発展の目覚ましい生成AIの活用法を教え、英語で書かれた資料の活用の際に積極的に利用できる環境を整備しても良いのではないのかと思われる。

6. 現時点でどのくらい意欲がありますか（薬学部独自項目）

薬学部のDPを念頭においた項目である。

「地域住民の健康の維持増進に貢献したい」、「他職種連携を実践したい」、「患者のQOLを向上させたい」、「患者の薬物療法に責任を持ち経時的に関わりたい」、「生涯にわたって情報収集や研鑽を継続したい」については、「大いにある」または「かなりある」と回答した学生が4～6割程度おり、中でも5年生で比較的高い傾向にあった。学年が進んでもこれらに対する意欲があまり変化しないのは、そもそも高い意欲をもって本学部に入學してきており、その意欲に本学部の教育が十分に応えているからではないかと推察される。5年生では医療の現場で実務実習を行ったことからそれまで以上に意欲が向上したものを思われ、実務実習の有用性が改めて感じられる。

7. もっと学ぶ必要があると思いますか（薬学部独自項目）

薬学部のCPを念頭においた項目である。

「一般教養科目」や、「化学系科目」、「薬理系科目」、「倫理・コミュニケーション系科目」、「臨床系科目」などといった「専門系科目」について、学年間で大きな変化は認められず、「とても思う」または「やや思う」と回答した学生は6～8割程度おり極めて高い状態にあった。本学のCPに基づく科目構成は学生のニーズに合っていると考えらえる。

「学修しにくいと感じている領域」について複数領域を選択してもらったところ、学年間で差はあまりみられず、「物理系科目」、「化学系科目」といった「基礎系科目」が上位にきていた。「基礎系科目」は低学年に配当されており、学年が上がっても学修しにくいとする割合が変化しないことから、苦手を克服できず進級している状態がうかがえた。一方で、「薬理系科目」や「薬剤系科目」といった「専門系科目」についてもそれなりに高い割合であるものの、「基礎系科目」に比べては低い割合であった。例えば「専門系科目」に結びついている土台の部分に集中して「基礎系科目」を教えることが、学生の学修しにくさといった意識を克服させる解決方法の一つではないかと考えられた。